

8月9日(火)発行

当日の感動を  
すぐお届け!!

特別協賛: **TOSHIBA**  
Leading Innovation >>>

ほぼ

# 日刊サマーミュージック

Hobo Nikkan Summer Muza

朝刊



貴重な初体験の連続！  
柔らかな響きで紡がれた「過渡期」の音楽

8月7日(日) 日本フィルハーモニー交響楽団「オーケストラの醍醐味 バボラークの英雄」撮影：青柳聡

フェスタサマーミュージックの7日の公演では二つの貴重な「初めて」を体験した。

まずは現在世界で最も高い評価を受けているホルン奏者、ラデク・バボラークのミュージック指揮者デビューだ。最初に演奏されたのはウェーバーの「魔弾の射手」序曲。バボラークは各楽器の音色の強調と融合をコントロールした多彩な音色を構築し、作品のテーマである「善と悪」の対比を見事に描き切った。

続いては仲道郁代をソリストに迎え、クーラウの「ピアノ協奏曲」の日本初演。第1楽章を筆頭

にベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第1番」と書法は似ているが、求められるテクニックは、音階やアルペジオが縦横無尽に鍵盤を駆け巡る、流麗さを強調したもの。仲道の美音、軽快なタッチと非常に相性が良い。特に旋律が装飾を繰り返しながら展開するオペラ・アリア的な第2楽章では多彩な歌い回しを聞かせ、楽曲の魅力を存分に示した。

後半はベートーヴェンの「英雄」。リズムの要素を強調し、打楽器を効果的に力強く響かせることで、落ち着いたテンポ設定で全体の響きを柔らかく統一し

ながらも、決して間延びすることのない演奏を展開。さらに大規模な変奏曲である第4楽章では、それまで抑え気味に作り上げて来たダイナミクスを一気に爆発させ、幅広い音楽性を示した。

ホルンの演奏と同じく、柔らかな響きと自然な音楽運びを聴かせてくれたバボラークの今後の指揮活動に期待が高まり、「知られざる」作品との素晴らしい出会いも経験できた素晴らしい夏の午後となった。

長井進之介  
(ピアニスト/音楽ライター)



マエストロ：ラデク・バボラーク  
ピアニスト：仲道郁代

終演後、サインをいただきました。

8/7 日本フィルハーモニー交響楽団

## お客様の声から♪

日本フィルのレベルの高さに加えて、バボラークさんの指揮者としての素質もかなり高いと思いました。出てくる音がとてもダイナミックでした (38歳・会社員・小川健) / バボラークの指揮は心配していたが旧スタイルの堂々たるもの。我々年寄りにはなつかしく感動的であった (77歳・前田安政) / ウェーバーのホルン四重奏をたっぷり聴かせるのがバボラークの真骨頂。仲道さんの可憐な演奏が心に沁みました (61歳・団体職員・小僧さん) / 実は公開リハーサルのファンでもあります。楽団の方が私服で登場され、親近感が持てるので。本番でのプロのお姿ももちろんステキです (48歳・主婦・至福サマーミュージック) / 初めて聴きました。クーラウは佳曲♪ライブラリアンの方に感謝です♪ (59歳・会社員・ナオパ) / クーラウを生演奏で初めて聴けるので期待して来ましたがやはり良い曲と再認識。全体的に自然な流れで、美しく、とにかくチャーミングな曲 (40歳代・会社員・佐藤茂)

## NEXT!! フェスタサマーミュージック

明日はどう聴く？ 20代応援団がナビゲート！

8月10日(水) 19:00 開演  
東京シティ・フィルハーモニック  
管弦楽団

ドイツ音楽の神髄！ 飯守泰次郎のワーグナー

指揮：飯守泰次郎

クラリネット：ペーター・シュミードル

ワグネルの聖地であるバイロイトで長らく音楽スタッフを務めるなど、日本におけるワーグナー演奏の権威として信頼の厚い飯守泰次郎。2000年からシティフィルと共に不定期で行ってきた「オーケストラ・オペラ」シリーズは、日本人によるワーグナー演奏の到達点と讃えられたほど。ともに身も心も捧げた相棒とのワーグナー名曲集に胸が高鳴らないわけがない！ 10月に新国立劇場で東フィルと共に上演する《ワルキューレ》がメインに据えられているので、飯守ワーグナーのお試しとしても最適だ。(小室敬幸 作曲/音楽学)

飯守泰次郎と東京シティ・フィルによるワーグナー演奏—この黄金の組み合わせを耳にするだけで胸が高鳴るのは私だけではないだろう。壮年期、バイロイト音楽祭にて多くの巨匠たちと共同作業を重ねてきたマイスター飯守が振るワーグナーは、聴く者を官能と陶酔の極致へと誘ってくれる。気心知れた東京シティ・フィルとは、サマーミュージックでは以前ブルックナー第7番の名演を披露した。新国立劇場のピットで更なる円熟を重ねる飯守泰次郎の音楽、真夏の夜に心ゆくまで堪能されたい。前半はウィーンの名手ペーター・シュミードルを独奏に迎えたモーツァルトのクラリネット協奏曲—これも贅沢というほかない。(平岡拓也 大学生/音楽プロガー)

